

2020(令和2)年法語カレンダー

# 心に響くことば

悲しみの深さのなかに  
真のよろこびがある

荻 隆宣

Ryusen OGI



本願寺出版社

# 心に響くことば——目次

表紙	悲しみの 深さのなかに 真のよろこびがある	5
一月	人も草木も虫も 同じものは一つもない おなじでなくて みな光る	11
二月	生のみが 我らにあらず 死もまた 我らなり	19
三月	本当のものが わからないと 本当でないものを 本当にする	25
四月	お念仏というのは つまり自分が 自分に対話する道	33
五月	いだかれてありとも 知らずおろかにも われ反抗す 大いなるみ手に	41
六月	人が何よりも 執着せんとするものが 自己である	47
七月	人間は死を抱いて 生まれ 死をかかえて 成長する	53
八月	念仏もうすところに 立ち上がっていく力が あたえられる	61
九月	自分のあり方に 痛みを感じるときに 人の痛みに 心が開かれる	67
十月	念仏とは 自己を 発見することである	75
十一月	拝まない者も おがまれている 拝まないときも おがまれている	81
十二月	智慧・慈悲のはたらき そのものが 「仏」なのです	89

表紙のことば

悲<sup>かな</sup>しみの  
深<sup>ふか</sup>さのなかに  
真<sup>しん</sup>のよろこびがある

瓜生津 隆真

(1932-2015)

Within the depths of sorrow, there is true joy.

お母さんは突然亡くなった。弘子ひろこの三歳のお誕生日から年末年始と、楽しい日々がまだまだずっと続くように思えた一月八日。博多にはめずらしい積雪の日のこと。早朝、お父さんを勤め先へ送り出して、一緒におでかけする予定だったのに、お母さんは「ちよつと気分が悪か」とお布団ふとんに横になったきり、もう二度と動くことはなかった。突然の脳内出血。即死状態だったそう。当時の弘子にはまだ死ということがわからなかった。ただじつと、お母さんが動くのを枕元で待っていた。

そのうちに喉が渴いてきた。何か飲みたいとお母さんを揺り動かしたが、まったく動く気配がない。流しの蛇口も弘子の背丈では手が届かない。周りを見渡すとちゃぶ台に水差しがあつた。「お母さんも飲むかなあ」コップに移してまず自分が飲んだ。もう一杯お母さんの分も入れた。「入れたよ」とお布団を引っ張つたが動かない。やがてお腹も空いてきたけど、見えるところに食べるものは何もなかった。

朝起きる。用を足す。顔を洗う。お着替えをする。ご飯を食べる。おでかけする。遊ぶ。ご本を読む。お片付けをする。お風呂を焚たく。お布団に入る。寝る。すべてがお母さんと一緒。あたりまえのように過ぎていた弘子の日常は、昭和十四年一月八日で突然止まってしまった。

弘子は、佐賀に住む祖父の家で暮らすことになった。祖父母はとて

も優しく、弘子を大切にしてくれた。

「お母さんは仏さまになんしゃったけん、もう見たり触ったりはできません。ばってん、弘子の中にはちゃんと仏さまでおってくださる。お母さんの弘子を呼ぶ声ば覚えとうね？ その声ば思い出してんごらん。いつでも弘子と一緒にけんね」

お父さんと離れさびしかったが、心の中でお母さんがいつも一緒に思うと、温かい気持ちになることができた。

祖父母は、人さまから何か物をいただいたときは、いつも必ずお仏壇にお供えをした。

「まあ、こげん良かもんばくださって、さつそくお供えさせてもらいます」

仏さまにありがとうと手を合わせながら、祖父はいつも、「弘子んお母さんにありがとうば言えんかったけんね、しっかりありがとうば言おうね」と、手を合わせていた。弘子も祖母も一緒に手を合わせた。

手を合わせる生活を大切にする中で、弘子はやがて、お母さんが一緒にいてくれたことが、あたりまえのことではなかったんだと気づかされた。お父さんがいてくれることも、祖父母がいてくれることも、近所の人、友達がいてくれることも、弘子を取り囲むご縁は、すべて感謝すべ

きことばかり。それ以来「ありがとう」が、自分の人生をよろこびへと変えてくれる言葉になった。

弘子にとってお母さんが死んだことは、つらく悲しい出来事になりはたらない。けれどお母さんは仏さまとなって、人生で本当によろこぶべきことが何かを教えてくれた。

これを一生大切にしようと思う弘子だった。

人も草木も虫も

おなじものは一つもない

おなじでなくて

みな光る

榎本栄一

(1903-1998)

While people and plants and insects all differ,  
the Buddha's inner light shines forth in all.